ブレンド型学習による多文化間共修授業における LMS の活用
－Moodle と Google Classroom による課題提出の比較－

Utilization of LMS in Multicultural Collaborative Classes in Blended Learning
-Comparison of Assignment Submission Using Moodle and Google Classroom-

濱崎　あゆみ[*1*2],合田　美子[*1],喜多　敏博[*1]
Ayumi HAMASAKI[*1*2], Yoshiko GODA[*1], Toshihiro KITA[*1]
[*1] 熊本大学大学院教授システム学専攻
[*1] Graduate School of Instructional Systems,Kumamoto University
[*2] 北京語言大学東京校
[*2] Beijing Language University Tokyo Campus
Email: ahamasaki@st.gsis.kumamoto-u.ac.jp

あらまし：少子高齢化に伴い、日本では労働人口の減少・人手不足の加速化が進む中で、労働人口に確保に向けた政策として「高度外国人材」活用が急務とされている。 本研究では、日本人学生と留学生が PBL 型授業と 2 種類の LMS を活用したブレンド型学習を通し、どの LMS がより効果的・効率的・魅力的に学習者同士による「学びのコミュニティ」を構築し、自律的な学びを支援できるか考察する。
キーワード：PBL 型授業，ブレンド型学習，LMS，多文化間共修，産学連携

1.　はじめに

少子高齢化に伴い、日本では労働人口の減少・人手不足の加速化が進む中で、労働人口の確保に向けた政策として「高度外国人材」活用が急務とされている。高度外国人材と日本人との協働が求められる中で、日本国内の大学でも「国際共修」や「多文化間共修」における研究がなされている。

本研究では、日本人学生と留学生が PBL 型授業と 2 種類の LMS を活用したブレンド型学習を通し、どの LMS がより効果的・効率的・魅力的に学習者同士による「学びのコミュニティ」を構築し、自律的な学びを支援できるかを考察する。

2.　授業実践

2.1 授業の概要

本授業は、3 年次後期の必修授業（2 単位・全 15 回・90 分/回）で、グローバル人材育成に向けたビジネススキルを学ぶキャリア科目の授業である。

2022 年度後期は、計 66 名の学生が 2 クラスに分かれて受講した。国籍の内訳として、A クラスが 30 名のうち日本 15 名・ベトナム 14 名・モンゴル 1 名、B クラスが 36 名のうち日本 9 名・ベトナム 23 名・モンゴル 2 名・ミャンマー2 名で構成されている。使用言語は、日本語・中国語・英語・母国語など多様な言語を使用する。教員によるアナウンスや LMS 上でのやり取りは主に日本語を使用するが、授業内ディスカッションや授業外での SNS チャットツール上でのコミュニケーションや ZOOM などのビデオ会議アプリを用いたグループでの話し合い、ニーズ分析調査のためのアンケート作成などでは主に中国語を使用している。

学習目標は、異なる言語・価値観・文化背景を持つ者同士がグループワークを通して、他者との関わり合いの中から自らの強みを活かし、課題解決に向け、チームを巻き込みながら働きかけることができる「協働力」の習得である。

本授業では、全 15 回のうちの第 10 回～15 回を扱う。「日本商品を中国本土に向けた新ビジネス展開の提案」という課題解決に向けたテーマ学習を実際に日本企業の中国ビジネス進出にむけた特化型ビジネスコンサルティング事業を行う A 社との産学連携による PBL 型授業を実施した（表 1）。

グループメンバーの振り分けは、ファシリテーターである教員から「チーム結成のための 5 条件」を提示し、クラス内学生全員による合意形成に基づいた話し合いで、1 グループ 4～5 人のチーム結成を行なった。

チーム結成のための 5 条件
①面識ない者同士で構成されている
②国籍のバランスを考慮する
③男女比のバランスを考慮する
④語学スキル（日本語・中国語）は考慮しない
⑤各グループに最低 1 名の日本人学生が入る

表 1　PBL 型授業の内容と提出課題

	授業内容（対面授業）	提出課題（Moodle）
第 11 回	テーマ確認 グループ結成	グループ結成報告
第 12 回	ニーズ分析	アンケート紹介
第 13 回	中国ビジネス展開する上での留意点	「提案書」仮提出
第 14 回	リハーサル	「提案書」本提出
第 15 回	報告会	リフレクション

		シート

第 15 回では、A 社 3 名の社員を迎え、学生達が新規中国ビジネス提案に関するプレゼンテーションを行う。発表後、社員の方々より質疑応答・フィードバックをもらった。

2.2 授業デザイン

本授業では、対面授業と LMS を活用したブレンド型学習による多文化間共修授業を実施した。授業テキストは、授業開始 2 日前までに Google Classroom・Moodle 内に公開し、学生は、主にスマートフォンに事前インストールした Google Classroom と Moodle のモバイルアプリケーションを用いて、Google Classroom と Moodle 内に事前共有された授業資料を授業前までに閲覧する。

対面授業では、各回授業開始時に、チームでの授業外での話し合いに時間通りに参加できたかといったグループで設定した「グランドルール」を振り返り、1 週間のグループ全体への貢献度を自己評価・他者評価を行い、互いを認め合う機会を作る。自らの行動を客観的に振り返り、相手から長所を褒められるといった他己承認を得ることで新たな気づきを得て、次の活動へ向けた行動目標を立て、グループにおける活動をメンバー同士で軌道修正しながら、グループ課題に取り組んだ。

授業後は、各回で提出期限を設けた必須課題を Moodle 内にて提出する。学習者は、Moodle 内に発信された課題に取り組み、「ディスカッショントピック」内で非同期型コミュニケーションによる相互間フィードバックし合うが、1 件以上は任意投稿とした。

3.　LMS 上における必須課題の提出状況比較

3.1 Google Classroom による必須課題の提出状況

コロナ禍により、オンライン授業を余儀なくされた 2020 年より本学では Google Classroom を一斉導入した。第 1 回～第 10 回までは、Google Classroom のみを活用した。Google Classroom による課題未提出率は、第 7 回が 18.18%と最も高く、第 1 回・2 回が 7.58%と最も低かった。課題未提出者の数は、第 7 回で 12 人、第 1 回・2 回は、5 人であり、第 1 回～第 10 回までの未提出者平均数値は 8.71 であった。また、コメント数は、第 3 回～6 回のみ 8 件のコメントがあった（図 1）。

3.2 Moodle による必須課題の提出状況

本授業の第 11 回～第 15 回では、Moodle 内で「ディスカッショントピック」を立て、非同期型コミュニケーションによる相互間フィードバックを行なった。第 11 回～第 15 回までの Moodle 内での課題未提出率 0%で全員が課題の提出を完了した。

また、コメント数は、第 12 回で 113 件のコメントと最も多く、最も少ないコメント数は、第 15 回の 38 件であった（図 1）。

4.　考察と今後の課題

LMS 上の課題提出状況を比較すると、Moodle の課題提出の方が、Google Classroom に比べ課題提出率が向上されることがわかった。

Google Classroom では、授業資料の共有と教員によるアナウンスメント機能はあったが、学習者同士による相互間コミュニケーションや学習者間同士が未提出者への課題提出を催促するまでは至らなかった。一方 Moodle では、対面授業での話題を Moodle 内に発信し合うことで、クラスの垣根を超えた学びのコミュニティとして『ヨコのつながり意識』が生まれたことがコメント件数の増加要因と考えられる。

また、課題完了報告として、Moodle 内「フォーラム」の「ディスカッショントピック」で課題完了コメントを投稿する。そのため、個々の学習進捗状況を学習者同士いつでも誰でもアクセスでき、他学生の課題提出状況を閲覧し、自らも早く取り組まなければという危機感やグループワークでグループメンバー全員の提出状況を確認し合うなど学習進捗の透明性が加わったことで学生同士の学習活動把握ができるため、教師が課題提出を促す前に学生同士で声をかけ合い、提出を促す学生同士の「暗黙ルール」が生じたことも要因であると考える。

今後は、授業前投影資料の閲覧者数などの活動ログの分析や Moodle 内コメントの分析する、さらに本授業を受講した学生達を対象になぜ Moodle での課題全員提出が実現できたかのアンケート調査や就職活動など受講後の学校生活で本授業の習得成果を行動変容として応用できたか追いかけ調査するなど、授業後の習得成果を明らかにしていきたい。

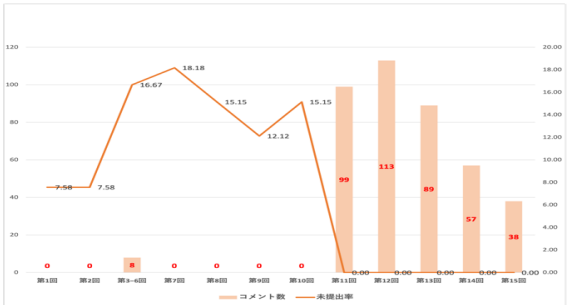

図 1　　LMS 上のコメント数と課題未提出率

参考文献

(1) 鈴木克明・美馬のゆり（編著）(2018)『学習設計マニュアル:おとなになるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房
(2) 鈴木克明（2015)『研修設計マニュアル：人材育成のためのインストラクショナルデザイン』北大路書房